

都市化の進展による農業地域への影響は一様ではない。地域の農業の商業性の程度によって離農化が急速にすすみ零細化にむかう地域と、安定した農業経営を営む地域が考えられる。

長野盆地に於ける

リンゴ栽培諸地域の地理学的考察

宮 本 洋 子

第1章 長野盆地の自然

調査地域長野盆地は、断層角盆地と考えられ、ここでは五つの地形単位に分類して地形とリンゴ園の分布状況を考えた。気候は内陸的であると共に表裏日本の中間型を示しているといえる。全国各地の雨温図によると、長野県付近がほぼリンゴ栽培適地の南限にあたるが、県内に於ける気温・降水をもとにした適地分類によると、本盆地はむしろ準適地に属することがわかり、主産地形成には気候条件(気温・降水)以外の影響が大きいことが認められた。又、各気候要素及び地形がリンゴの生育・生理に与える影響を述べ、他産地との比較を行なった。

第2章 農業とリンゴ

長野県の産業の中心は何とんでもまだ農業にあり、古くから農業の性格は主として商品作物に特色づけられるが、現在ではリンゴが土地利用上に於ても、農家経済上に於ても比重は大きく、特に本盆地では著しい。

第3章 リンゴ栽培の発展

リンゴ栽培が、栽培技術・市場規模・市場価格・養蚕の盛衰等の諸条件によりどのように分布していったか、その過程をここでは5期に区分した。県内盆地中、長野盆地がリンゴ産地となったのは、気候条件よりむしろこの過程にあらわれる偶然のきっかけ及び試作場の所在の影響が大きいと考えられた。又、盆地内のリンゴ導入時期が地形と密接な関係にあることも認められた。

第4章 リンゴ経営・販売流通

盆地内でも特に主産地と考えられる地域について経営状況を考察した。経営形態としては、いわゆる富農的性格がこの地域にもあてはまり、さらに飯米生産地域がリンゴ栽培地域と一致することが判った。共同化は出荷面では他産地に比べて非常に進んでいるのに比し、防除面の遅れが目立っ

たが、この点についての確定的な原因はつかめなかった。労働としては、飯米農家が主たるリンゴ栽培農家である関係上、リンゴと稲との労働力の競合が問題となるが、盆地北部の1毛作で開花期が遅い地域と、盆地南部の2毛作で開花の早い地域との接合部に於て、特に著しい競合が生ずることがわかった。販売・流通としては、生産量・品種・輸送・市場について述べた。長野リンゴそのものもつ特性(例えば早出し)に加えて、市場との位置関係及び輸送面での有利性がうまく生かされてはいるが、一方価格ののびなやみ及び4大市場に於ける県産リンゴの地位(売上高)低下など、当面かかえている問題も多い。

第5章 3地域の対比

盆地内の3地域をとり、それを対比させることにより地域の違いが、具体的にリンゴ栽培上どのようにあらわれてくるかを考察した。自然条件としては、地形・水利・土壌・小気候を調査した。3地域に於て勿論様々な条件が絡みあって、そこにリンゴ栽培を行なわしめているのであるが、茶臼山麓部では主として土壌的に負の条件が、厚川南部氾濫原平野ではリンゴの経済的有利性が、松川扇状地では水利的に負の条件が、主としてリンゴ栽培を推進させる力となっているのではないかの考えに至った。小気候と関連深いと思われる開花期は非常にきちんとした違いを見せている。社会条件としては、導入時期の違い、主産地・非主産地の違い、共同化等について考察した。しかし、導入の違いは、「発展」の所で述べたとおり、地形の違いによるものであり、又、上記の様に土壌その他の条件を通しての地形の影響が大であることから、盆地内での主産地を決定しているのは地形ではないとの考えに至った。

南多摩郡多摩町・稲城町における農業と都市化

森 宏 子

本地域は東京の中心より約28km離れた東南郊に位置し、昭和32・33年頃までは農業土地利用が主の近郊農業地帯を形成していた。しかし、最近の都市化によって農業の不振はさけられなくなりつつある。

少し前まで人口の新たな定着は平坦地に限られていて、丘陵部はたとえ交通の便が良くても宅地化がほとんど行なわれなかった。しかし、昭和30年頃から強大な人口圧による宅地需要は農地山林で残されていた丘陵部を宅地に変化させつつある。本地域はまさにこの丘陵部に位置し、昭和32年頃から都市的土地利用の増大、人口増加、特に都市的人口の増加、又は農業の後退など、諸々の